

# 大丈夫、きっとなんとかやっていける

「星の花が降るころに」(二年)  
安東みきえ

—魅力的なタイトルですが、どんな思いが込められているのでしょうか。

私の家に、二階まで届くくらい大きくて、きれいなドーム型をした金木犀の木があるんです。木の中にいるとプラネタリウムのように、外の世界から遮断されたような感じを受けるので安心感があります。でも、そんな心地のいいところに、いつまでもいられるわけではない。外の世界は必ず存在していて、いずれ出ていかなければなりません。星の形をした花が散り始めた木を、そういう象徴として考えてみました。

—この作品は、女の子どうしのすれ違いが大きなテーマになっています。

私も経験がありますが、中学生の頃は、友人関係で悩むことがよくあります。そんな

なに思い通りにいくわけではないし、始終すれ違いがあつたり、自分や相手がいじわるな気持ちになることだつてあります。

後で思い返すと、たぶんささいなことであのときあんなに深刻に思い悩む必要はなかったんだ、と今なら思えますけどね。でも、この頃の子どもつて、特に友人関係では、ほんとうに小さな悩みでも、すぐ落ち込んでしまう。最悪のバターンだと、命を落とすこともあります。そういう報道を見聞きするたびに、大人として、なんとかしなければと切実に思っていました。

いっぱい嫌なことはあるけれど、それでも頑張つてそれを「やり過ぎず」タフさをもつてほしい。そんな願いを、最後の、「大丈夫、きっとなんとかやっていける。」

という言葉に込めました。

現実の社会では、けんかした子たちが、必ず仲直りして元どおりのいい関係に戻るということばかりではない

けれど、でも大丈夫。川が流れていくように、どんな嫌なことも押し流して、新しい水がどんどん流れてくる。そんなエールを送りたかつたんです。

これを読んだときに、全員にすぐ伝わらなくてもいいんです。心の引き出しにしまつておいて、何かのときに思い出してくれればいいなと思っています。

—男子のほのかな恋愛感情も織り込まれていますね。

そういう感情は、成長していく上で、とても大事なことだと思っています。また、この時期の女の子は、同級生の男の子がすぐく子どもつてよく見えて、先輩の男子に憧れるということがよくありますよね。でも、子どもにも見える同級生の男子でも、「なかなか、やるじゃん」と思える場面を描いて、男の子もがんばれと伝えたかった。

ただ、情景描写がロマンティック過ぎると、男の子が音読をするときに照れてしまうので、普通の小説を書くときと違って、甘くなり過ぎないような表現を心がけました。



児童文学作家。1953年、山梨県生まれ。

97年版の国語教科書に「そこまでとべたら」が掲載。2001年に『天のシーソー』で椋鳩十児童文学賞を受賞。

主な著書に「頭のうちどころが恶かった熊の話」「夕暮れのマグノリア」「呼んでみただけ」など。